



JICR.ORG 通信



手島繁一（法政大学 / 協同総研）

次世代インターネットの鍵を握る「二つのB」

新世紀初頭のインターネットの話題は「二つのB」に集中しています。「二つのB」とは、「Broadband」(ブロードバンド)と「Bluetooth」(ブルートゥース)のこと。

「Bluetooth」(ブルートゥース)は、無線通信技術のことで、PCや周辺機器(ルーター、プリンター、マウス、キーボード、スキャナー、デジカメなど)を無線で結び、コードレス環境を実現するものです。また、現在は個人で環境を構築するには、機器が高価(一般的なLAN環境構築でも、5万円程度)なため普及の速度は今一歩なのですが、恐らく今年後半からは価格が劇的に下がり、各機器間通信の主流になっていくものと予想されています。

「Broadband」(ブロードバンド)を実現する「二つの方策」

もう一つの「B」、すなわち「Broadband」(ブロードバンド)とは文字通りには「広帯域」と訳されますが、インターネットの世界では、「通信回線の速度が高速で、そのため通信回線を通るデータ容量が大量であること」、簡単に言えば「高速大容量」の通信回路のことをいいます。早くから、次世代インターネットの鍵を握るものとして熱い注目を浴びてきましたが、世紀転換点に符丁をあわせるかのように、ここにきて急速に「Broadband」(ブロードバンド)回線の整備と普及が進んできました。そのため、「2001年はブロードバンド元年」「インターネット常時接続元年」という謳い文句が喧伝されています。

「2005年までに全家庭に光ファイバー網を整備して超高速インターネット網を普及する」ことを国家目標として掲げた「IT基本法」が、昨年11月に制定されたことも一つの追い風になっています。ところが、光ファイバー網によるインターネット接続は、FTTH(Fiber To The

Home)とも言われますが、その行方は依然として不明確なままです。というのも、わが国の電話回線の6割以上はもう既に光ファイバーに置き換えられており、大都市圏では各家庭への電話回線を束ねる「き線点」までは光ファイバーになっているのですが、そこから各家庭への配線には膨大な費用がかかること、またその費用を誰がどのように負担するかの合意が得られていないこと、などの大問題があるからです。いわゆる「ラスト*ワンマイル」問題です。

そこで、F T T Hが抱える難問を回避しつつ、高速大容量通信を実現する方策が注目を浴びることになったのです。なかでも、C A T V(もともとはCommunity Antenna TeleVisionの略語なのですが、今ではC A b l e TeleVision の略語として通用している。有線テレビ)とA D S L (Asymmetric Digital Subscriber Line、非対称デジタル加入者回線)の二つは、次世代インターネットを実現する最も有力な方策として、急速な普及が見込まれています。

実際、インターネットの先進国であるアメリカでは、C A T VとA D S Lがインターネット接続の主流になっており、パソコンのO Sを握ることによって「パソコン財閥」を築いたMicrosoft 社は、「インターネット財閥」に転換すべく、C A T V局の買収工作に血道を上げています。余談ですが、日本最大のC A T V運営会社であるJ C O M(ジェイコム)はMicrosoft 社の傘下に入りました。

私的「Broadband」(ブロードバンド)体験記

実は、私も新世紀を期して(?)「Broadband」(ブロードバンド)の世界に入ることにしました。地元のC A T V局によるインターネット接続サービスの利用料金が大幅に下がったことを契機に、従来の電話回線を使ったアナログ・ダイヤルアップ接続から、C A T V接続に切り替えました。だって、今までは初期費用8万円だったのが、何をトチ狂ったのか2万円に値下げしたんですもの、「これは乗らない手はない」!

イヤ! 速い! 快適! というのが実感。アナログ・ダイヤルアップ接続の場合は、モデムを立ち上げ、それからおもむろにジーコジーコとダイヤルして、ガーだのピーだのといった接続音があってから、「接続に成功しました」というメッセージが出てくるんですね。この段階で、回線やサーバーが混雑していると「回線がビジーです」だとか、「接続が確立できませんでした」などと言われてめげてしまいます。さらにですよ、「接続成功」とのメッセージが出て油断できません。重いページにでもアクセスしようものなら、ページがフルオープンするまで、じっと我慢で

「最強の検索エンジン」Googleの登場

インターネットの広大な情報の海を上手に航海するコツの一つは、「検索エンジン」を使いこなすことにあります。「検索エンジン」は「検索サービス」「検索サイト」、英語では「search engine」「search tool」とも呼ばれています。実は、インターネットの中でもっともアクセスが多いサイトは、「検索エンジン」なのです。

この検索エンジンの世界で大異変が起っています。98年に創立された新興の検索エンジン「Google」（「グーグル」と発音します）が、高速で高度な検索機能を武器に急速にシェアを拡大し、あっという間に「最強の検索エンジン」の地位を獲得してしまいました。一日平均アクセス数約3億8500万回と桁違いの実力を誇っていた世界最大の検索エンジンである「Yahoo! USA」は、2000年度から「Google」を検索エンジンとして採用することにし、自らはポータルサイト（インターネットで最初に訪問する、「総合案内」サイト）に特化する戦略に転換しています。

Googleは、2000年9月には日本語版をリリースし、日本語での検索が可能になりました。実際に使ってみて驚くことは、自分が探すキーワードのイメージにきわめて近いサイト、ページを見事に探し出して、検索結果の上位に並べてくれるということです。

なぜこうしたことが可能になるのかということの詮索は措くにしても、従来の検索エンジンと比べて、はるかに優れているのは、以下の点です。

(1)高速であること。Googleは「検索にかかった時間」を表示してくれますが、どんなキーワードであっても、ほぼ0.20秒以内で検索結果が表示されます。

(2)どういう訳かはわかりませんが、ノイズ（雑情報）がほとんど混入されないこと。

例えば、下記の表をご覧ください。下記の表は「協同総合研究所」「労働者協同組合」「高齢者協同組合」という三つのキーワードを各検索エンジンで検索した結果を表示しています。

ネットを利用している方はよく経験することですが、公式HPを一発で当てることは結構難しいものです。今でこそ、「ソニー」だの「厚生労働省」だの「メジャー系」の場合は、ブラウザの「アドレス・バー」にそのままの言葉を日本語で打ち込めば、公式HPを開いてくれるようになりましたが、協同総研だとか日本労協連など「非メジャー系」(?)の場合はそうはいきません。例えば協同総研というキーワードを打ち込んで、多数でてくる検索結果一覧から「勘に頼って」公式HPのトップページを見つけるか、それとも検索結果一覧に表示されているページを一つ一つ開いてたどり着くか、いずれにしてもかなりの「熟練」と時間を必要としたものでした。

Googleの場合、探したい組織なり団体名をキーワード欄に打ち込んで、「I'm Feeling Lucky」というボタンを押せば、どのような組織・団体であろうが、ほぼ間違いなく公式HPのトップページを開いてくれます。わたしのような、もっぱら「非メジャー系」(?)組織・団体を相手に商売している人間にとっては、この機能は大変助かります。

GoogleのURLは、<http://www.google.com/>

複数の検索エンジンを同時に使う

各検索エンジンにはそれぞれ特徴があり、ひとつの事柄やキーワードを複数の検索エンジンでサーチしたい場面があるでしょう。こうした場合、各検索エンジンを一回一回開いたり閉じたりして探すのはかなり面倒です。

ここで役立つのが「メタサーチエンジン」です。「メタサーチエンジン」とは、ある特定のキーワードに対して複数のサーチエンジンを同時に使って、一気にサーチをかけるものです。前述の表は「メタサーチエンジン」を使って検索したものです。

国内の代表的な「メタサーチエンジン」を紹介しましょう。

* search desk <http://www.searchdesk.com/>

* WAKANO <http://www.wakano.co.jp/>

* ナレッジエリーサーチ <http://kd.iws.ne.jp/kms/kqs>

* メッチャ検索エンジン <http://bach.seg.kobe-u.ac.jp/metcha/>

付録として、検索に役立つ参考書を二つだけ上げておきます。

* 別冊宝島編集部編『もっと使える！インターネット検索術』宝島新書、2000年4月

* 関裕司『インターネット 最強の検索術』リブロス、2000年12月